



讀畫本

石濤山水

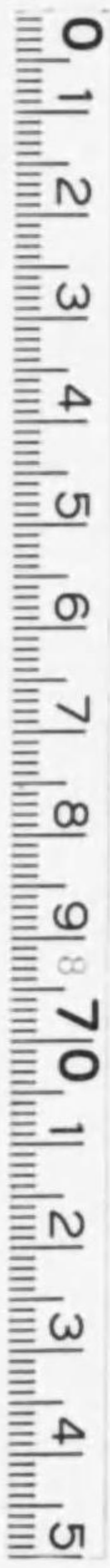
特261

370

134

341

128



始









讀 書 本 石 濤 山 水

香 光 道 人 閱  
一 路 居 士 述

作 者 小 傳

道濟字は石濤、青湘老人と號す、一に清湘陳人、清湘遺人とも云ふ、又大滌子、苦瓜和尚、諸尊者等の別號あり。此人明の楚藩の裔なり。書は山水蘭竹花卉を兼ね善くし、小景亦得意なり、筆意頗る縱恣にして、所謂稟白を脱し當時已に江南第一と推賞せられた。清初の人なり。

巨匠の書跡を精鑑するは、經書を讀むと等し、書中自然あり人生あり、哲理あり、一度視て已に養はるゝの感あり、讀み來り 究め去つて彌その高きを仰ぐ。石濤の書即是れなり、幸に觀過することなかれ。

此冊、宋元故人の詩意によりて、石濤自らの胸中山水を書き、自身書中の人となりて、煙霞に逍遙する様を讀破するを要す。





秋水春雲萬里の空、酒壺書卷一孤蓬、多情最も是れ閑鷗鷺、留め得たり詩人釣翁と作るを。

元、黄庚、淋雲居 印は 零 丁老 とよめる

右肩の印 頭白真 然不識字 石濤所用の遊印なり

右下の印 亭 素 これは此の書幀の注文者素翁の所藏印なるべし（最後の幀参照）

石濤の點景人物は粗筆甚だ拙に似たるも、姿態極めて巧妙、看者直に書の詩意を領するに足る。舟中に在る讀書漁人の樂天ぶりを羨む。細横線の水の描寫、並に上段淡墨を流して水涯漂渺の表現真にせまるを覺ゆ。  
水紳は石濤獨特の描寫にして、多數の其作に屢これを見る。







春州錦未  
 有名水  
 遠上亂抽  
 紫似嫌  
 車馬繁華  
 地塊入城  
 門便多生  
 宋劉攽  
 春州

春艸綿々未だ名あらず、水邊々上抽紫を亂る、嫌ふに似たり車馬繁華の地を、纔に城門に入れば便ち生ぜず。

宋 劉攽 春艸

丁香  
人老

市井と郊外の對比、市井の人事徒らに煩勞にして春至るも省みず、一度郊外に至りて、青艸綿々の色に駭く、何人も此嘆ありて然かも現實の生活に如何ともする能はず。春山靄々たる表現の美を視るべし。





艸枯れて根は死せず、春到つて又榮を敷く、獨り愁根の在る有り、春も亦自ら生ずるに非ず。

宋 真德 秀艸

印 前有 龍眠濟

淡墨數染に水草茂育の狀を表はし得て妙、遠山春靄にかすむあたり、書ずして畫くの技、石濤ならではと、感又嘆！  
 畫中の仙史、郊に立つて胸中萬感を秀艸に托して 喜悅するの狀、詩人にして始めて之を解せん看者以て如何となす。





晴靄翠紛々、春橋水乍分る、山家何れの處か是、松外萬重の雲

元 王行、松雲二士圖

印は 前有  
龍眠濟

春郊散策、二高士の風懷視るが如し。

車輪法の松は、北宋書法の常套なり、石濤これを南書に活用して其獨特の眞松の表現に成功したるを見る。

春靄を白く残して、人物を引き立て、前山との距離を表はし得て妙。

石橋斜なる、その前方數筆にその邊地物の變化を説明したる皆讀むべし。



寂莫たる亭基野渡の邊り、春流平岸<sup>セン</sup>草々<sup>セン</sup>たり、一川<sup>セン</sup>晚照<sup>セン</sup>人<sup>セン</sup>閑<sup>セン</sup>に立ち  
滿袖の楊花杜鵑を聽く。

鄭協 溪橋晚興

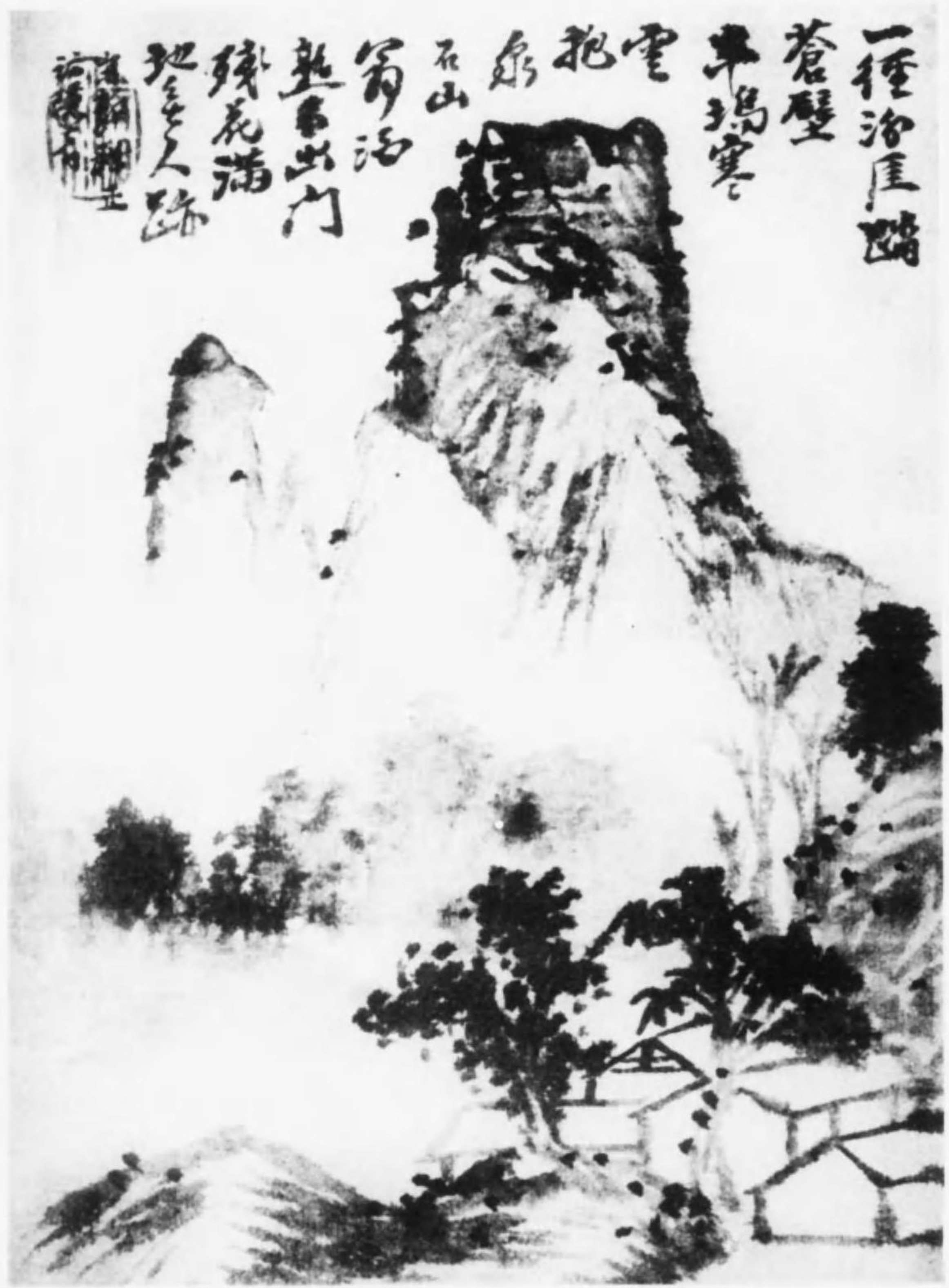
印 丁零  
人

圖曲一見平凡に似て而かも玩索し來れば、詩趣の盡きざるを覺ゆ。  
春日遅々、暮れなんととして、未だ暮に至らず、河岸に佇立して惜春の情轉切なるの時、杜鵑  
一聲、  
人物拙に似て然かも全面を領する其位置と 全林の靜寂さを讀むを要す。

寂莫亭基  
野渡邊  
春流平岸  
草々  
一川  
晚照  
人閑  
立  
滿袖  
楊花  
聽  
杜鵑







一徑汾崖着壁を踏み、半塢の寒雲泉石を抱く、山翁酒熟して門を出でず、殘花地に満ちて人跡無し。

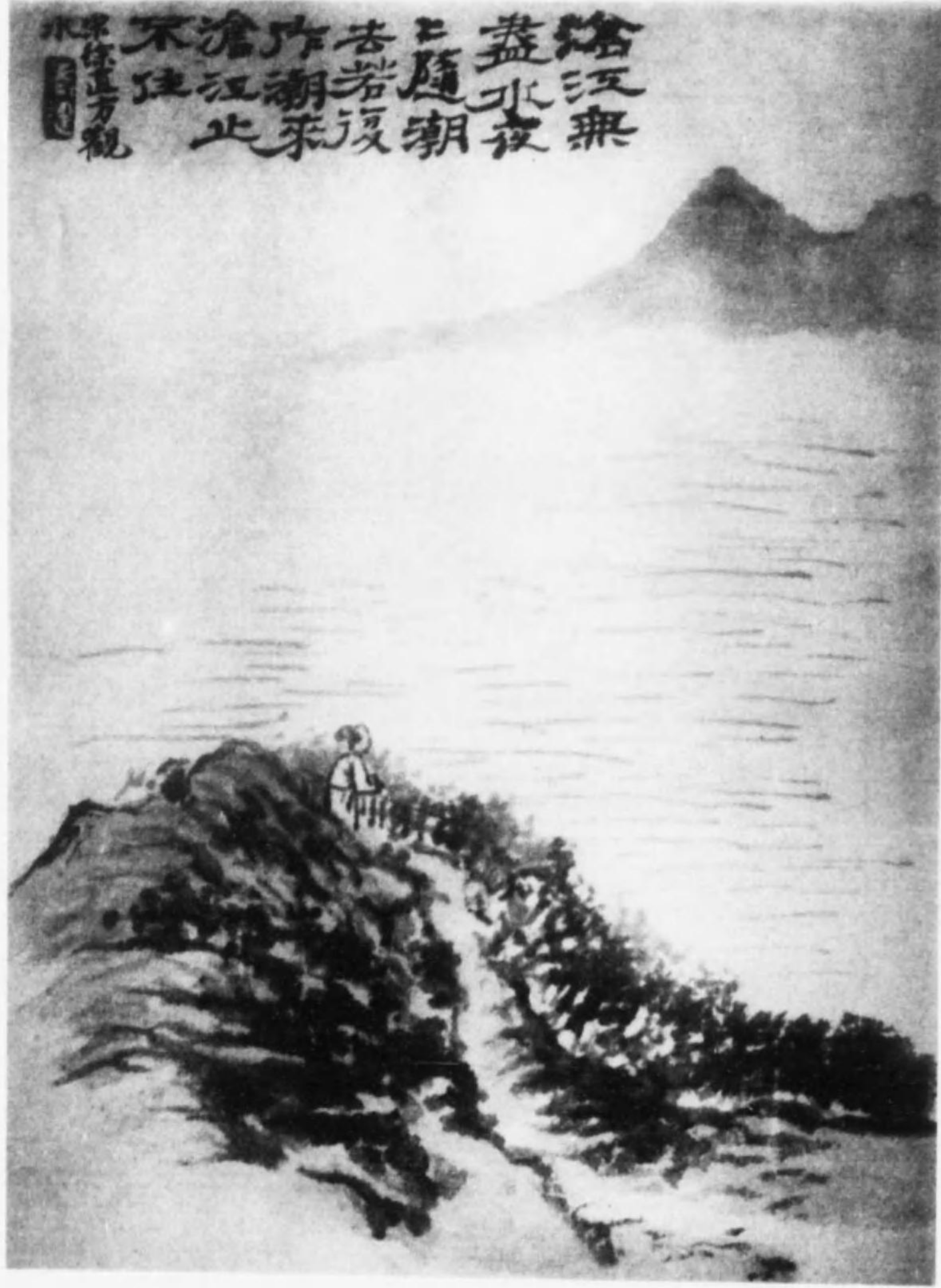
宋 郭祥正 訪隱者

萬物欣々として榮にむかふ初夏、鬱々たる林泉の美徑をたどりて、桂花香はしき 高士の隱栖に來る。靜寂たる茂林の描法と、巖山雲を生ずる妙筆に酔ふ。

幽居を最近景に畫きたるは、普通の構圖と一寸異なりたるを注意すべし。

印は 清湘 老人





滄江無  
盡水夜  
上隨潮  
去若復  
作潮來  
滄江不  
住  
宋 徐直方 觀水

滄江水盡くる無し、夜々潮に随つて去り、若しくは復潮と作つて來たる、滄江は止住まらず。

宋 徐直方 觀水

印 老壽

洋々たる流水、古來幾多の詩人に不住觀を詠せしめたる、單簡なる構圖の中一切只流水の表現を高調したるを視る、三角の遠山愈よ水を汪溢たらしむ。





江上往來の人、盡く鱸魚の美を愛す、君看よ一葉の舟、風濤の裏に出  
没するを。

宋 寇準 贈釣者

印 老 濤

江邨三四家のほとり、叢樹數幹。其樹法の靈妙さを見よ、畫もこゝに至りて極まれりといふべし、すでに畫かれたる紙墨に對するを忘れて、身は直ちにその綠蔭に接するの感あり。





遠近皆僧刹  
西村八九家  
得魚無處  
費沽酒入  
蒼  
宋郭祥正  
西印



遠近皆僧刹、西村八九家、魚を得るも賣る處無し、酒を沽かふて蘆花に入る。

宋 郭祥正 西邨

印 前有  
龍眠濟

前岸 叢樹の間、數屋の殊更に大なるも、可笑しからず、河中一横淡墨に平沙を表はし同時江の廣さを語る、魚の賣れざるを幸に。一杯吞まんとする舟子の風流、兩好漢聊詩を解す。





甲子峰頭烏樹に白づく、微霜未だ落ちず己でに先紅なり、闌に凭りて  
 高看復下看、半は石池波影の中に在り。

宋 林逋（林和靖）水亭秋日 遇成

印 清湘  
 老人

突兀なる前山夕陽紫に、静水半ば山影をひたして、歸鳥鳴々。

澗邊の小屋に俯仰する先生、好詩數編無かるべからず。

山頂、水面、人物、天地人布置の妙諦と、墨色の生彩を見るべし。





木葉西風古道、稻花北墪新田、  
流水美人何處、夕陽荒艸連天、

(二字宛音讀スベシ)

宋 陳普 野步  
印 痴斷

道路の傾斜、山稜線の交錯、その墨色の殊に光彩ある、秋山に夕陽映帶する色彩を視るが如し。  
遊士、秋天に吟行して歸路、山下新田に、長くその影を投ずるかを憶ふ。



素翁洋紙を以て余の寫畫を索む、因りて宋元諸公吟韻を取りて圖一十  
二幅を成し、寄せ上り笑を索む。清湘大滌子

印 老滌

こゝで揮毫の由來が明記されて、一層味がある依頼者素翁、當時この十二幅を得て、如何  
の感かなせる、三百年後の知己、此の如きを、苦瓜何ぞ識らんや、素翁も亦、嗚呼、  
又用紙の説明あるは更に一興である、洋紙とあるも何れの産紙にや墨色より想見するに或  
は朝鮮紙日本紙の類ならんか？  
早天、霜を付して鹽背發足の狀、前方秋林朝霧に隱顯するあたり 或は此圖、帖中の白眉な  
らんか。廣重、三島の圖と對比せば妙。

客行己に且なりと謂ふ、出て、視れば落月を見る、瘦馬荒陂に入り、  
霜花重きこと雪の如し。

宋 孔文仲 早行

印 痴斷

墨書 樓書 左下の大印 珍賞 これは後の製藏者の印と見るべし







東京神田九ビル二階二八三

和風堂

電話九ノ内三六三九番  
振替東京三一七二二番

香筆墨  
文房具  
揮毫用紙  
色紙短冊  
佛經念珠  
佛具  
其他

貫名海屋書

楷書松井遊見叟碑文稿二種

松翁の肉筆を其儘玻璃版に附したるもの、直に晋唐に迫る傑作、楷書を學ぶもの必ず座右に備ふべき法書

價一圓二十錢

日下部鳴鶴の書

鶴翁書簡

一代の書聖の尺牘を年代を追ふて集め寫眞凸版に附し巻尾に釋文を附す、行文と書林と直ちに日常の規範となすべし

價一圓三十錢

昭和七年一月二十五日  
昭和七年二月十日

印刷 價 壹圓五拾錢  
發行

著者 一路居士

京橋寶町二ノ四

發行所 馬場一郎

印刷所 岡庭光藝社



終